自校のこれからの教育を考える

若手教師と校長が自校の教育課程のあり方を語り合う

次期学習指導要領が目指す「社会に開かれた教育課程」の具現化には、教科や学年を超えて学校全体で取り組んでいく「カリキュラム・マネジメント」が重要になる。そのための第一歩となるのは、育てたい生徒像やその実現に向けた課題を、全教職員が共有し、理解することだろう。そこで、茨城県立小瀬高校の校長と若手教師が、中央教育審議会教育課程部会の委員を務める髙木展郎横浜国立大学名誉教授をアドバイザーに迎え、討論会を実施。自校の取り組みと、そこから見えてきた課題や疑問について語り合った。

＊プロフィールは2017年3月時点のものです

学校教育目標を教師間で共有し、学年の指導に反映

小瀬高校では、どのような学校教育目標を立てて教育課程を編成しているのかという話題から討論会はスタートした。

石井　本校は常陸大宮市の旧緒川村地域にある唯一の高校です。生徒は地元の中学校出身者が大半で、「地域の役に立ちたい」と語ります。卒業後は幅広い年齢の人たちと対話しながら生きていくことになりますから、そうした生徒たちに必要となる力は、異年齢間でのコミュニケーション能力だと捉え、各教科が教科の特性に応じて工夫し、指導しています。

福地　国語科では、教師間で話し合い、社会に出たら「伝え合う力」が重要になるという共通認識を持って、各学年の指導に反映させています。例えば、3年生の現代文の授業では、本校のPR動画を製作しました。実は、進路学習で本校のよさを書かせた際、生徒からほとんど言葉が出てこないということがありました。そこで、本校の魅力に気づかせたいという思いもあって、PR動画の製作を取り入れたのです。生徒は、動画の内容を検討していくうちに、12年連続で就職率が100%であること、7年連続で国公立大学合格者が出たことなどが他校にはない本校のよさなのだと分かり、客観的な視点を持てるようになっていきました。そして、創り手を経験することで、表現力が身につくとともに、評論や小説の読解で書き手の考えや思いを読み取る意識が高まっていきました。

石井　完成作品はどれも本校の魅力が伝わる力作で、生徒の愛校心が高まる機会にもなっていました。就職や入試の面接で、本校の特色や地域のよさを自分の言葉で語れるようになり、地域に誇りを持てるようになったのも、大きな成果でした。

生徒の課題を基に、いかに資質・能力を育むかを考える

宮本　外部研修などで聞いた他校の様子と比較すると、伝えるためには相手の考えをしっかり聞くことが重要だと捉えて、「聞く力」の育成にも力を入れているのは、本校の特色だと感じています。

福地　進路集会などで講師の話を聞く際に、生徒にメモ帳を配布し、要点を書き取るように指導していましたが、大事なポイントがつかめずに、メモが取れないということが分かりました。そこで、聞き取りの指導を行い、国語の定期考査でリスニングテストも課しています。テストでは、案内文や説明文を聞かせて、日時や要点を答える問題を出しています。

石井　今では校外学習先でも褒められるほど、生徒に聞く姿勢が身についてきました。先生方が、目の前にいる生徒の課題を起点に指導を考え、具現化しているのが、本校の強みです。

髙木　それこそ、次期学習指導要領で実施が求められている「カリキュラム・マネジメント」の基本と言えるでしょう。目標を一度決めると、その目標を達成することに縛られがちですが、小瀬高校では生徒の課題から学力として身につけるべき資質・能力を見いだし、指導して、柔軟にPDCAサイクルを回している様子がうかがえます。

石井　今後は、知識の習得に加え、生徒が主体的に学ぶ場面をバランスよく取り入れていくことを、特に若手教師に考えてほしいと思っています。

髙木　そのために必要なのが、単元計画です。生徒は自然に資質・能力を身につけるのではなく、教師の指導によって身につけていきます。何を教えて、どう考えさせるのかを、意図的に組み立てる必要がありますし、単元計画があることで学校としての教育の質が保証されます。

宮本　私が指導で悩んでいるのは、評価についてです。授業で身につけてほしい力を生徒に意識させることに注力しすぎて、振り返りが十分にできていませんでした。生徒に学びの自己評価をさせていますが、その規準を明確に示せていません。

髙木　振り返りは、自分ができていることとできていないことを認識させ、次の行動につなげる意味があります。そのためにも単元計画は有効です。例えば、生徒に単元計画を渡し、1時間の授業の流れを黒板に書いておけば、目標と今の学習の内容が分かり、自分がどこまで到達しているかを認識できるでしょう。

学んだことを活用できる場を日常的に組み込む

石井　教科学習以外では、中高連携でも「伝え合う力」の育成に力を入れています。本校は連携型中高一貫教育校として、近隣の2つの中学校と授業や行事などで連携し、生徒・教師ともに交流を深めています。特色ある活動は「ふれあいキャンパス」（**下記参照**）です。中学1年生～高校3年生がともに学ぶ中で、高校生は後輩を引っ張り、中学生は先輩の頼もしい姿に触れ、双方に様々な学びが生まれています。この活動をさらに深い学びの場にしようと、次年度の「ふれあいキャンパス」の内容を中高の生徒が自ら議論する「ふれあいキャンパスディスカッション」を開きました。高校3年生を中心に進めましたが、高校1年次から異年齢と接する中で「伝え合う力」を育成してきた成果が見られ、生徒は中学生を盛り立てながら、活発に議論を進めていました。

福地　日常的に話す場を設けていたのがよかったのだと思います。例えば、清掃後に、その日の一番印象的な出来事を話す活動をしていますが、校長が時々飛び入り参加しますよね。とっさの時にも敬語で話せるようになるなど、対応力がつきました。

宮本　私が顧問を務める吹奏楽部では、地域の福祉施設などで演奏会を開く際、観客がもっと楽しめるようにと、生徒にレクリエーションを考えさせ、司会も任せています。生徒たちは回を重ねていくうちに上手に進行できるようになり、今はその場に応じて話せるようになりました。

髙木　生徒が授業で学んだことを活用できる場面が、学校全体の教育活動にうまく組み込まれていますね。

今こそ考えたい、なぜ中高連携は必要なのか?

宮本　実は、「ふれあいキャンパスディスカッション」の準備で中学校の先生方と話す中で、中高の指導観の違いを感じ、改めて中高連携の意味について考えています。

髙木　子どもは学校段階に関係なく連続して成長していきますが、学びが学校段階間で途切れてしまっているのが問題です。例えば、「伝え合う力」は、学校段階や教科の枠を超えて育成できますから、小・中学校から「聞く」「話す」の指導を受けてきたら、高校ではその学びに積み上げた指導ができ、生徒の「伝え合う力」をさらに伸ばすことができます。そのような「接続」をするために、中高が協働し、学校段階間がつながるカリキュラムが必要なのです。

福地　生徒たちは中学校時代まで、人前に出て話すという経験をあまり積んでいませんが、本校の活動で鍛えられて、対話力が身についたと感じます。そうしたことを学校外の人たちにも知ってほしいと思います。

石井　全県一区となり学校の地域性が薄れつつありますが、だからこそ地域の子どもは地域で育てることの意義をいま一度、中学校・高校ともに考える必要があると思います。「ふれあいキャンパスディスカッション」終了後、中学校の校長から「自校の卒業生が堂々と話す姿に感動した」と感謝されました。生徒が活躍する姿を直接見てもらうことで、本校の活動の意義を理解し、協働が進むようにしたいと考えています。

地域における自校の役割を考えて、教育課程をつくる

宮本　私は16年度に本校に赴任し、本校の教育の根底に流れる「地域のために」という思いは、先生方が築き上げた伝統なのだと感じました。一方で、中心となる先生方が異動されたら、その思いが消えてしまうのではないかといった不安も感じています。

石井　本校の目指す学校像に「基礎学力の定着」「社会規範の涵養」「地域に貢献できる人材の育成」などを掲げていますが、「何のために行っているのか」という目的は明文化されていません。それをしっかりと明確化し、学校全体で共有する必要があります。一方で、地域の力を活用することも考えています。地域の人から「小瀬高校はこういう学校だ」と言われ、地域の中で本校の役割が明確になれば、異動してきた先生も地域が本校に求める教育をしなければと思うようになるはずです。そうした地域の目があれば、本校の教育の根本は受け継がれると思います。

髙木　地方の多くの高校が抱える問題に正面から取り組んでいるのが、小瀬高校だと思います。「地域が衰退していく」と嘆くのではなく、生徒が生きていく地域にはどのような教育が必要とされているのかを考えて教育課程を編成し、「学校が地域を築いていこう」としているからです。

石井　本校が生徒に育みたい資質・能力として、「小瀬型学力」を掲げようとしています。それは言うなれば「親」になる力です。生徒が大人になり、地域で子どもを育て、その子どもが本校に入学してくる。そうした循環をつくることで、地域に人が根づき、地域が活性化し、地域における本校の役割は確固たるものになっていくでしょう。それが、本校が目指す「地域に役立つ人材」の育成であり、そのための教育課程を編成していきたいと思います。

校長

茨城県立小瀬高校　校長

石井純一

いしい・じゅんいち

教職歴30年目。同校に赴任して1年目。茨城県教育委員会等を経て、現職。

教職歴1年目

茨城県立小瀬高校

宮本夏海

みやもと・なつみ

2016年度、新規採用で同校に赴任。担当教科は国語。吹奏楽部顧問。

茨城県立小瀬高校

◎2003年度から連携型中高一貫教育校となり、常陸大宮市立明峰中学校、同御前山中学校と、カリキュラムや行事などで連携・交流を深める。「特別進学」「教養」「福祉」の3コースを用意し、生徒の多様な進路希望を支援。

◎設立　1899（明治32）年

◎形態　全日制／普通科／共学　　◎生徒数　1学年約80人

◎2016年度進路実績（現役のみ）　国立大は、茨城大に1人が合格。私立大は、茨城キリスト教大、つくば国際大、常磐大に4人が合格。短大、専門学校進学16人。就職43人。

◎URL　http://www.ose-h.ibk.ed.jp/

教職歴5年目

茨城県立小瀬高校

福地千文

ふくち・ちふみ

教職歴5年目。同校に赴任して5年目。担当教科は国語。3学年担任。

アドバイザー

横浜国立大学
名誉教授

髙木展郎

たかぎ・のぶお

髙木名誉教授プロフィール

兵庫教育大学大学院学校教育研究科言語系修了。専門は教育方法学、国語科教育学。東京都公立中学校教諭、神奈川県立高校教諭、筑波大学附属駒場中学・高校教諭、福井大学、静岡大学を経て、2016年3月まで横浜国立大学。近著に『「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは』（東洋館出版社）、『「チーム学校」を創る』（共著）、『変わる学力、変える授業。— 21世紀を生き抜く力とは—』（ともに三省堂）。

授業での学びを日常的に使えるよう、部活動でも伝え合う場面を意識して取り入れる

宮本

「地域を支える人材を育む学校が地域を築く」という思いを教育課程で具現化する

石井

小瀬高校の取り組み

ふれあいキャンパス

連携先の明峰中学校と御前山中学校、小瀬高校の3校の全校生徒が一緒に学ぶ1日講座。5回目となる2016年度は9月に実施。「振り子の世界」「人工イクラを作ろう」「英語を使って弓道を楽しもう」など、9教科16講座を開講。3校の教師が合同で指導にあたり、高校生も上級生として後輩を支援した。

ふれあいキャンパスディスカッション

2017年2月、「2017年度の『ふれあいキャンパス』をより魅力的にするために自分たちにできることは何か」をテーマに、中学1・2年生と高校1～3年生の計297人がグループに分かれてディスカッションをした。

全校で目標を共有しているから、生徒の課題に応じた指導を柔軟に取り入れられる

福地

生徒の課題から必要な資質・能力の育成を考えることが、カリキュラム・マネジメントの基本

髙木